

③ 学び合いのネットワークの力で子育て支援の循環を生み出す 「職員採用基準は、地域活動を10年した人」

「かなーちえ」の「6+1」機能

神奈川県地域子育て支援拠点「かなーちえ」は、各区に1か所設置されている、子育ての拠り所となる施設です。

「かながわく」と「チェリッシュ（慈しむ）」がネーミングの由来です。「親子のひろば」「相談の場」「情報の場」「ネットワークづくり」「人材育成」そして「よこはま子育てサポートシステム」の6つの機能を持っています。

また、今年の2月からは、個別支援と地域支援を2本柱とし、子育て期の色々な悩み事、困り事について専任スタッフ（横浜子育てパートナー）が一緒に考え、必要な情報を提供し、適切な支援機関を紹介しつなげる利用者支援事業もスタートしました（モデル事業・28年1月から全区展開）。

「かなーちえ」は行政との協働で運営しています。行政の公平性等と民間ならではのきめ細やかさと小回りの良さがミックスされています。

児童館での勤務が出发点

社会福祉系の学校を卒業後、目黒区の児童館の職員として働き始めました。「大人と子どもの触れ合いを求めて」が運営スローガンのこの児童館で、「子育てが地域をつなげる」という事を学びました。地域との様々な連携事業を通して、「地域づくり」のエッセンスを肌で感じ取りました。若い職員としての私を、子ども達、偉大な先輩方や地域の人が10年間、育ててくれました。

これが私の今に至るまでの活動の原点となっています。

その後、結婚、出産後に、職場復帰しました。

約30年前の横浜の子育て事情に、当時啞然としたのを覚えています。公立保育園は閉園が16時〜17時。近所の私立保育園は保育料が月6万円、保育の質も子どもの育ちに寄り添うものではないと感じました。

そこで、退職。
自分の子どもが育つ横浜で、子育てしながら、今度は

目黒区の地域の人達に支えていただいた恩を地域に返していくことにしたのです。

反町公園が私の子育ての現場でした。母達はみんな、0歳の子どもを地べたでも這わせていました。「少しくらい砂を食べても大丈夫だよ」と。大らかな風土でした。

公園に行けばいつでも、誰か親友がいて、だんだんと顔見知り同士でオープンなコミュニティが生まれ、子育てグループへとなっていました。その頃は、子育てグループの育成事業として、区から補助金が支給されていました。私のグループも申請を通して区とのつながりができていきました。

平成4年頃、これまでの経験を活かしたいと思い、区の地域振興課の窓口相談に行きました。社会教育主事から保育ボランティアグループ「こぶし」を紹介されました。

実は、「かなーちえ」のスタッフは、この時代から「こぶし」で共に活動したメンバーが中心となっており、20年を超え

るチームとなっています。「こぶし」につないでくれた社会教育主事は、人とグループ、事業をコーディネートし、ニーズに沿ってさり気なくサポートをしてくださる人でした。

その頃、横浜市でも、「パートナーシップ」「市民との協働」という流れが芽生えた始めた時期でした。平成10年、白幡の森プレイパーク立ち上げ時も、「神奈川県生きがいキャッチアップ事業」申請に、丁寧に対応していただきました。地域活動の折々にこうした熱い行政マンとの出会いがありました。

「こぶし」は生涯学習グループです。日々の保育活動や、自主事業後は必ず振り返り共有する。「自分達の弱いところは何だろう」、「どうしたら良くなるのか」、「講師を招いて講座を開こう」そんな学び合い、語り合いを重ねていきました。保育主催者である区の各課、施設の担当者とも顔が付き、我々も区役所の中を縫うように動いています。今のネットワークの布石

③ 横浜でつながりを創る人々に伺う

塚原 泉さん

神奈川県地域子育て支援拠点「かなーちえ」施設長。NPO法人親がめ理事。白幡の森プレイパーク代表。「つながる！ちえのわくわく」が塚原さんのモットー！



聞き手

松村 健也

神奈川県子ども家庭支援課担当係長

戸矢崎 悦子

神奈川県課長補佐（子ども家庭支援課）子ども家庭支援担当係長

になっています。

そして、平成11年には後のNPO法人親がめにつながる「神奈川県すくすくかめっ子事業」が始まりました。

職員採用基準は「ネットワー

クを持っていくこと」

「かなーちえ」の職員採用基準は、「その人自身が地域でネットワークを持っていること」としています。「かなーちえ」はそこ一か所で神奈川県をカバーしなければならぬ。そこで、羽沢地区と三ツ沢地区にも独自にサテライト会場を週1回開催し、「遠くてなかなか行けない」という声に応えています。また、地域ケアプラザやプレイパーク、公園などに出向く「出前かなーちえ」事業を毎月定期開催しています。職員は出向いた先、連携先と良い関係を築き、事業を共催し、子育て中の人達のその地区ならではの声を聴き、活きた情報を交換し、各種チラシをニーズに合わせて手渡しつなげると



親子のひろば

いったたくさんのステップを進めていきます。凝縮された一期一会の時間の中では、これまでの地域活動で培ってきたスキルが必須です。つながりの種はどこで芽をだすかわからない、自分自身が地域の人として成長してきたからこそ実感です。市民としての視点を自分の中に十分に染み込ませた、ネットワークを紡ぐ力が必要なのです。

本当にその人にあつた支援を

目の前の子育て当事者の力を信じ、尊重し伴走する事。専門家ではない親しみやすさ、という着ぐるみを着て支援の出発点に立つ事を大切にしています。

地域の路地裏情報も、これまでの地域活動や、子育て中の人の生の声から収集し、職員間で共有・更新してきました。

例えば、静かに過ごしたい人には「あの場所ならゆたったりした雰囲気ですごせそう」と日常会話から真のニーズを汲み取り、地域の場や機会につなげていきます。「かなーちえに相談すると、自分が本当に欲しい情報がもらえる」と思ってもらえるよう、力を入れていきます。

会議だって面白くなければ意味がない

「顔と顔が見える関係づくり」が大事ですね。「かなーちえ」では、講演会の案内や通信などを、近くであれば、なるべく直接手渡しで届けに行くようにしています。自転車に乗って。そうするうちにお互いの顔が見える関係になり、何かの時には、電話で話せるようになります。

会議の持ち方、進め方にも力を入れていきます。資料を読めばわかるような会議にはしません。ワークショップ型が多くなります。自由に語り合え、本音が出て、感動を共有できる。そんな時間を目指して工夫しています。地域活動時に数々のワークショップに参加し、持ち帰り試行し自分達のものに形を変えてきた経験からくるものです。

参加者が本当に気づきを得た時に、会場が一瞬シーンとなり、「アーそうだったのか」という思いが波のように会場に流れる。「かなーちえの交流会は面白い！忙しくても行きたい」という声が聞こえるように、これからも勉強していきます。

思いを共有すること、そして「場」づくり

かなちえに限ったことではありませんが、事業が長く続く秘訣は「思いを共有すること」ではないでしょうか。

「地域ぐるみで子育て・子育てを見守る大切さ」を地域と共有する機会を色々な場面で創っています。思いは場に伝わっていくので。地域の支え手さんのエネルギー・親身な寄り添いを、子育て世代が受け止め「今は子育てで忙しいけれど、子どもが幼稚園に入ったら支える側に回ろう」という循環がみられるようになってきました。そうして世代を継いだ場が育っていきます。運営9年目を迎えた「かなーちえ」にも「場の力」が宿っています。時に内心驚くような人×場の効果・発見があります。保育園・幼稚園に根柢となる理論があるように、地域子育て支援拠点にも支える理論が必要な時期にきていると言われています。今後、18区の拠点ネットワークで、進めていかなければならない課題です。

コミュニティデザイナーは市の井の人にこそいる

コミュニティデザイナーというと、何か特別な専門家のようにとらえてしまいますが、でも実は、まちの中にそ

ういった人達は一杯いるのです。一人一人が持っている知識や技能を組み合わせることで掛け算で力が生まれます。出合いの場、つないでともに学び合える場を専門家の力を借りて創っていく。拠点の役割です。

私は家の近くの地区センターによく行くのですが、趣味やテーマで集う元気な中高年の方々がたくさんいらっしゃいます。単発型自主事業の内容を地域づくりの人材発掘、育成にシフトして、ぜひ、面白い企画を届けてほしい。各地で人材発掘が課題に上る中、既に人が集う場を変えていく近道を行政に主導してもらいたい。これからも地域の活性化に向けて協働で歩んでいきたいと思っています。

【インタビューを終えて】

まさに市民活動のお手本の一つ。「小回り」のきいたサービス提供、そして「本当に利用者が欲しい情報は、どのか」を突き詰める姿は、どのような仕事にも通用するのではないのでしょうか。そして、このような市民活動に我々行政の立場から何が出来るだろうか、改めて考えさせられました。(松村)